

純粹経験から「離れる」ことはできない

～西田幾多郎著『善の研究』第一編第一章「純粹経験」分析

2017年12月12日 宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

本稿は、西田幾多郎著『善の研究』（岩波文庫）の第一編第一章「純粹経験」の分析である。第一章は、以下に示す文章から始まる。純粹経験について語られる際、しばしば引き合いに出されるものだ。

経験するというのは事実其儘に知るの意である。全く自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粹というのは、普通に経験といっている者もその実は何らかの思想を交えているから、毫も思慮分別を加えない、真に経験其儘の状態をいうのである。それで純粹経験は直接経験と同一である。（『善の研究』17ページ）

・・・西田は、『善の研究』第一編において、知覚のみでなく、思惟・意志・知的直観も純粹経験であることを示そうとしている。純粹経験とは実際に経験している具体的事実なのである。実際に経験していることが純粹経験なのであるから、当然と言われれば当然である。

如何なる精神現象が純粹経験の事実であるか。感覚や知覚がこれに属することは誰も異論はあるまい。しかし余は凡ての精神現象がこの形において現われるものであると信ずる。（18ページ：以下、引用はすべて『善の研究』岩波文庫より）

純粹経験説の立脚地より見れば、我々は純粹経験の範囲外に出ることはできぬ。（25ページ）

・・・しかし、西田は思惟・思考や意志というものが純粹経験の事実としてどのように現れているのか正確に説明することに失敗してしまっている。本文中で詳細に述べるが、最も重要な間違いは、純粹経験を“状態”と見なし、そこから「離れたり」、純粹経験の状態が「破壊」されたり、そういう視点から捉えてしまったことなのである。そのため上記の説明と齟齬を来してしまい、辻褄を合わせるために「大いなる体系」や

ら「統一作用」という具体的経験の事実（純粹経験）として現れることのない“想定概念”の力を借りることになってしまった。

ただ、このような西田の視点のブレや、“心理主義”と捉えられかねない心理学的説明を除外すれば、純粹経験についての的確な説明が現れてくることも事実である。そして第一章の説明を綿密・詳細に分析すれば、第一編全体の論点をほぼ網羅することもできるであろう。

<目次>

I. 純粹経験とは「思想上の現在」ではない／純粹経験から「離れる」ことはない（2 ページ）

II. 『善の研究』における「表象」とは（6 ページ）

III. 情動的経験は「統一作用」とは違う（7 ページ）

（1）欲求・動機が言語化・概念化されていようがいまいが「純粹経験の範囲外に出ることはできぬ」

（2）「統覚作用」「統一作用」という純粹経験はないが、情動はある

（3）まずは「意志⇒行為」という“自然的態度”をエポケーする必要がある

IV. 西田は言語の位置づけを明確にしていない（11 ページ）

（1）言葉の「由来」の問題と「言葉の意味とは何か」という問題の混同

（2）純粹経験を“状態”として分析する誤謬⇒純粹経験として現れない”背後にある”想定概念による根拠づけ

（3）純粹経験は何も超越しない

<追記>（15 ページ）

I. 純粹経験とは「思想上の現在」ではない／純粹経験から「離れる」ことはない

先ず純粹経験は単純であるか、尙た複雑であるかの問題が起こってくる。直下の純粹経験であっても、これが過去の経験の構成せられた者であるとか、また後にこれを単一なる要素に分析できるかという点より見れば、複雑をいってもよからう。しかし純粹経験はいかに複雑であっても、その瞬間においては、いつも単純なる一事実である。(19 ページ)

・・・純粹経験とは単なる「一事実」である、それが「要素に分析」できようができませんが、それは事後的な分析、「直下の純粹経験」において、経験はあくまで一つの経験なのである。

純粹経験の現在は、現在について考える時、已に現在にあらずというような思想上の現在ではない。意識上の事実としての現在には、いくらかの時間的継続がなければならぬ (James, *The Principles of Psychology*, Vol. I. Chap. XV)。(19～20 ページ)

・・・「現在について考える時、已に現在にあらずというような思想上の現在」と純粹経験とは違う、ということなのである。ここでいう「思想上の現在」とは、「過去⇒現在⇒未来」と「常に時が流れる」という一般的時間概念、「現在＝瞬間」のことであると考えるよと思う。

つまり純粹経験＝(思想上の)現在＝瞬間ではない、これらをごったにして考えるはならないということなのだ。厳密に言えば、純粹経験は一般的時間概念といったん切り離しておくものだ、ということなのである。「純粹経験の現在」という表現や「時間的継続がなければならぬ」という説明も、少々誤解を招くものであるが・・・とりあえずここでは「純粹経験＝時間(一般的時間概念)」ではない、と認識しておけば十分であろう。

そうならば、純粹経験の”範囲”はどこからどこまでなのか、という疑問が出てくるかもしれない。その答えとして「意識の焦点がいつでも現在となる」(20 ページ)とされている(とりあえず「現在」という表現はそのままにしておく)。「意識の焦点」に関しては次のように説明されている。

たとえば一生懸命に断岸を攀ずる場合の如き、音楽家が熟練した曲を奏する時の如き、全く知覚の連続 *perceptual train* といってもよい (*Stout, Manual of Psychology, p.252*)。また動物の本能的動作にも必ずかくの如き精神状態が伴うて居るのであろう。これらの精神現象においては、知覚が厳密なる統一と連絡とを保ち、意識が一より他に転ずるも、注意は始終物に向けられ、前の作用が自ら後者を惹起しその間に思惟を入るべき少しの亀裂もない。これを瞬間的知覚と比較するに、注意の推移、時間の長短こそあれ、その直接にして主客合一の点においては少しの差別もないのである。特にいわゆる瞬間知覚なる者も、その実は複雑なる経験の結合構成せられたる者であるとすれば、右二者の区別は性質の差ではなくして、単に程度の差であるといわねばならぬ。純粹経験は必ずしも単一なる感覚とはかぎらぬ。心理学者のというような厳密なる意味の単一感覚とは、学問上分析の結果として仮想した者であって、事実上に直接なる具体的経験ではないのである。(20~21 ページ)

・・・(「動物の本能的動作」はさておき)この説明は様々な解釈が可能になりそうであるが、間違っていないのは「精神統一・精神集中すれば純粹経験が現れてくる」とか「忘我の境地」とかそういう話とは違う、ということなのだ。精神統一・精神集中しているとか忘我の境地に入ったとか、そういうのは「思慮分別」(17 ページ)による事後的解釈にすぎないのである。ただ、その行為あるいは対象に、何がしかに没入している間(「間」という表現も誤解を招きそうだが)は、それが「一事実」なのである。

「純粹経験は必ずしも単一なる感覚とはかぎらぬ」、あるいは事後的に経験を分析して見いだされた要素、科学的に見いだされた感覚の要素(たとえば「心理学者のというような厳密なる意味の単一感覚」)、要するに思慮分別により導き出された要素と純粹経験とを混同してはならない、ということでもある。

純粹経験の直接にして純粹なる所以は、単一であって、分析ができぬとか、瞬間的であるとかいうことにあるのではない。かえって具体的意識の厳密なる統一にあるのである。意識は決して心理学者のいわゆる単一なる精神的要素の結合より成ったものではなく、元来一の体系を成したものである。(21 ページ)

・・・ただ問題は、先の西田の説明を読むと、精神集中が途切れたり、「思惟」が入ってしまったらすれば純粹経験が壊れてしまうような印象を受けてしまうところである。

意識においては、先ずその一端が現れると共に、統一作用は傾向の感情としてこれに伴うて居る。我々の注意を指導する者はこの作用であって、統一が厳密であるか或いは他より妨げられぬ時には、この作用は無意識であるが、しからざる時には別に表象となって意識上に現われ来たり、直に純粹経験の状態を離れるようになるのである。即ち統一作用が働いて居る間は全体が現実であり純粹経験である。(23 ページ)

・・・しかし、一方で西田は次のようにも述べている。

如何なる精神現象が純粹経験の事実であるか。感覚や知覚がこれに属することは誰も異論はあるまい。しかし余は凡ての精神現象がこの形において現われるものであると信ずる。(18 ページ)

純粹経験説の立脚地より見れば、我々は純粹経験の範囲外に出ることはできぬ。(25 ページ)

・・・そもそも「無意識」は経験として現れないから無意識なのである。それは決して「純粹経験」ではなく「思慮分別」(因果関係)により導きだされた概念であるにすぎない。そして、純粹経験の「状態」から「離れる」ようなことはありえない。様々な“状態”における具体的経験、実際に経験している様々な“状態”が純粹経験なのであって、ある“状態”が純粹経験で、ある“状態”になれば純粹経験から「離れる」のではないのだ。西田は「思惟」も「意志」も純粹経験であることを示そうとしているにもかかわらず、ここで見解のブレが見られるのである。

西田は、純粹経験における「一事実」の定義をただけだったにもかかわらず、その「一事実」から「他の事実」への「変化」を、「純粹経験を離れる」と誤認してしまったのだと言えよう。西田は「純粹経験の範囲」(20 ページ)という言葉のほかに「純粹経験の綜合はどこまで及ぶか」(19 ページ)とも表現している。これは純粹経験という“状態”が維持される「範囲」のことなのではなく、純粹経験が「一事実」として綜合される範囲のことを表しているのである。

あるものをじっと見ていたが、ふと時計を見たとする。それは経験の事実の「変化」であって、純粹経験から「離れた」わけではない。あくまで時計を見ているだけである。

テレビの番組を何気なく見ていたが、あるときハッと気が付いて、「あそこに映ってるのは近所に住む〇〇さんだ！」と叫んでしまったとする。これも単に叫んでしま

ったという経験の事実（あるいは何らかの情動的感情やとも伴っているかもしれない）が現れた、それだけのことに過ぎないのである。

II. 『善の研究』における「表象」とは

次の問題点としては、「表象」という概念の位置づけにおけるブレである。

かく意識の本来は体系的発展であって、この統一が厳密で、意識が自ら発展する間は、我々は純粋経験の立脚地を失わぬのである。この点は知覚的经验においても、表象的经验においても同一である。表象の体系が自ら発展する時は、全体が直に純粋経験である。（21～22 ページ）

・・・知覚的经验はともかく、「表象的经验」とはいったい何なのであろうか？

表象的经验はいかに統一せられてあっても、必ず主観的所作に属し、純粋の経験とはいわれぬようにも見える。しかし表象的经验であっても、その統一が必然で自ら結合する時には我々はこれを純粋の経験と見なければならぬ、たとえば夢においてのように外より統一を破る者が無い時には、全く知覚的经验と混同せられるのである。元来、経験に内外の別あるのではない、これをして純粋ならしむる者はその統一にあって、種類にあるのではない。表象であっても、感覚と厳密に結合して居る時には直に一つの経験である。ただ、これが現在の統一を離れて他の意識と関係する時、もはや現在の経験ではなくして、意味となるのである。また表象だけであった時には、夢においてのように全く知覚と混同せられるのである。感覚がいつでも経験であると思われるのは、それがいつも注意の焦点となり統一の中心となるがためであらう。（22 ページ）

・・・以上の説明から、表象とは思い浮かんできた心像のようなものを指していると考えられる（実際、第二章の途中で心像という言葉に置き換えられる）。それら心像も知覚も、ただ現れた経験、純粋経験であることには変わりない。「経験に内外の別あるのではない」のである。

意識においては、先ずその一端が現れると共に、統一作用は傾向の感情としてこれに伴うて居る。我々の注意を指導する者はこの作用であって、統一が厳密であ

るか或いは他より妨げられぬ時には、この作用は無意識であるが、しからざる時には別に表象となって意識上に現われ来たり、直に純粹経験の状態を離れるようになるのである。即ち統一作用が働いて居る間は全体が現実であり純粹経験である。(23 ページ)

・・・これでは少し前の「表象」の説明と食い違ってしまっているのではないか？ 第 I 章で説明したが、西田が言うような「表象」が”意識上に”現れ来たとしても（この表現には問題があるが本稿では触れない）、その「表象」という純粹経験が新たに現れてきたにすぎず、純粹経験を「離れる」ことはないのである。表象＝心像であるならばなおさらである。西田が、経験の「一事実」が「他の事実」へ変化しただけのことを、純粹経験を「離れる」と誤認してしまったことは第 I 章で指摘した。

そして、表象が純粹経験であるということは、当然ながら「具体的経験の事実」でもある。つまり具体的経験として現れることのない「イデア」のような”想定概念”では決してない、ということでもある。

Ⅲ. 情動的経験は「統一作用」とは違う

次は「意志」に関する分析である。

(1) 欲求・動機が言語化・概念化されていようがいが「純粹経験の範囲外に出ることはできぬ」

主意説のいう様に、意志が意識の根本的形式であるといい得るならば、意識発展の形式は即ち広義において意志発展の形式であり、その統一的傾向とは意志の目的であるといわねばならぬ。(23 ページ)

・・・これはあくまで「仮定」の話ではないか。そもそもが「意志が意識の根本的形式である」ということが純粹経験の事実として現れているのだろうか。「意志の目的」というものはあくまで西田自身の純粹経験の”解釈”、すなわち”思慮分別”であって、果たして「目的そのもの」が実際に純粹経験として現れているだろうか？

純粹経験とは意志の要求と実現との間に少しの間隙もなく、その最も自由にして、活潑なる状態である。勿論選択的意志より見れば此の如く衝動的意志に由りて支配せられるのはかえって意志の束縛であるかも知れぬが、選択的意志とは已に意志が自由を失った状態である故にこれが訓練せられた時にはまた衝動的となるのである。意志の本質は未来に対する欲求の状態にあるのではなく、現在における現在の活動にあるのである。(23 ページ)

・・・一般的印象としての無意識的行為が「目的」「本質」であって、そうでないのは「目的に至る過程」のような分類は、純粹経験の論点からずれているのではないか？ もちろん欲求・動機が概念化され意識せられた状態⇒欲求・動機が実現された状態（それによって無意識化される・・・？）という過程そのものを否定するものではない（欲求・動機そのものが純粹経験として現れているかどうかは厳密に検証する必要があるが）。しかし、いずれにせよ、

如何なる精神現象が純粹経験の事実であるか。感覚や知覚がこれに属することは誰も異論はあるまい。しかし余は凡ての精神現象がこの形において現われるものであると信ずる。(18 ページ)

純粹経験説の立脚地より見れば、我々は純粹経験の範囲外に出ることはできぬ。(25 ページ)

・・・ということなのである。既に何度も述べてきたが、概念化（言語化）されたり新たな心像（表象）が現れたりしたとしても、それは決して「純粹経験から離れた」のではなく、純粹経験が「変化」した、新たな純粹経験が現れた、ただそれだけのことなのである。

(2) 「統覚作用」「統一作用」という純粹経験はないが、情動はある

三度、以下の文章であるが・・・

意識においては、先ずその一端が現れると共に、統一作用は傾向の感情としてこれに伴うて居る。我々の注意を指導する者はこの作用であって、統一が厳密であるか或いは他より妨げられぬ時には、この作用は無意識であるが、しからざる時には別に表象となって意識上に現われ来たり、直に純粹経験の状態を離れるよう

になるのである。即ち統一作用が働いて居る間は全体が現実であり純粹経験である。(23 ページ)

・・・思考や意志・動機と呼ばれている一連の経験に、情動的経験が伴うことが多いというのは事実である。事実関係の把握においても意志・動機の概念化(言語化)においても、「何か違うのではないか?」と違和感やら不快感を感じていたり、行為の結果を予測・想像してわくわく感やら安堵感のようなものを感じたり、そういった情動的感覺、上記の文章における「傾向の感情」によって”指導”されているというか、導かれているような感じはあるし、実際、思考や行為における重要な要因であることは認めざるをえないであろう。

また、情動を強く感じるときに「意識がある」ように思い、情動をそれほど感じないときに「無意識」であると感じる、という傾向も、確かに見て取れると思う。そういった”因果關係的分析”は可能ではある。

問題は、それを「統一作用」と呼んでいいのか、ということである。あくまで純粹経験の事実としては、何か感じた、その感覺のみであって、それが何らかの「作用」を施したというのは、因果關係構築による事後的分析、要するに”思慮分別”の産物なのである。そして「作用そのもの」の経験が純粹経験として現れることはない。あくまで経験の事実として現れているのは、情動的感覺やら言語やら心像やら、そういった具体的事実のみなのである。

また、「統一」「不統一」によって純粹経験の”状態”であったり、そこから離れたりということが実際起っているのか、という問題もある。これも何度も述べてきたことであるが、純粹経験から「離れる」のではなく、経験が「変化」した、新たな経験が現れた、ただそれだけのことなのである。

(3) まずは「意志⇒行為」という”自然的態度”をエポケーする必要がある

意志の本質は未来に対する欲求の状態にあるのではなく、現在における現在の活動にあるのである。元来、意志に伴う動作は意志の要素ではない。純心理的に見れば意志は内面における意識の統覚作用である。而してこの統一作用を離れて別に意志なる特殊の現象あるのではない、この統一作用の頂点が意志である。思惟も意志と同じく一種の統覚作用であるが、その統一は単に主観的である。しかるに意志は主客の統一である。意志がいつも現在であるのもこれがためである

(Schopenhauer, *Die Welt als Wille und Vorstellung*, § 54)。 (24 ページ)

・・・これまでに述べてきたように、上記の「統一作用」「統覚作用」、あるいは「統一」「不統一」にかかわらず、どこまでも純粋経験の事実だ、ということなのだ。

「未来に対する欲求」といったところで、結局は思い浮かんだ心像やら言語表現やら、あるいは実際に描いた絵やら図やら、それに伴う情動的感覚やら、そういった具体的経験に還元されてしまうのである。つまり、そこにあるのは純粋経験だけ、そもそも主客が分離していない、ということなのである。「意志がいつも現在である」とは要するにそういうことなのだ。

「統一作用を離れて別に意志なる特殊の現象あるのではない、この統一作用の頂点が意志である。」という説明に関しては、情動的経験（統一作用？）が意志の概念化（言語化）において重要な要因となっているという因果的分析は可能である。しかし、繰り返すが「無意識」は純粋経験ではない。経験として現れないから無意識なのである。そもそも「無意識」に「意志」や「動機」などあるのか、という問題もある。結局のところ、

行為・行為の結果・行為に伴い予想される結果

⇒意志・動機という「概念・言葉」を用いた”解釈”

なのである。意志⇒行為、あるいは意志⇒経験、なのではない。あくまで経験⇒意志（としての解釈・言語化）なのだ。そして、それはあくまでも”解釈”、本当かどうか究極的に確かめる術はなく、どこまでも「仮説」にとどまらざるを得ない。どこにもない、経験として現れないものを確かめようがない。

「純粋経験とは意志の要求と実現との間に少しの間隙もなく、その最も自由にして、活潑なる状態である」（23ページ）という表現からもわかるように、西田は「意志」という”概念”を純粋経験の”状態”で説明しようとしてしまったのである。

しかしそうではない。純粋経験の事実としては、「意志そのもの」の具体的経験などどこにもない。それらは具体的経験の因果的分析より導かれた”解釈”、一種の”想定概念”、”思慮分別”の産物なのである。

IV. 西田は言語の位置づけを明確にしていない

(1) 言葉の「由来」の問題と「言葉の意味とは何か」という問題の混同

例えば、一の色を見てこれを青と判断したところが、原色覚がこれに由りて分明になるのではない、ただ、これと同様な従来 of 感覚との関係をつけたまでである。(24 ページ)

・・・一見もっともらしい説明ではあるのだが、これは事後的な因果関係分析であって、純粹経験の事実そのものではない。

勿論原経験を想起した場合に、前に無意識であった者が後に意識せられるような事もあるが、こは前に注意せざりし部分に注意したまでであって、意味や判断に由りて前になかった者が加えられたのではない。(24～25 ページ)

・・・そもそもが「前に無意識であった者」が「後に意識せられる」となぜ分かるのか？ これも様々な因果関係の連鎖を辿り推測される事柄である。「意味や判断に由りて前になかった者が加えられたのではない」というのはもっともではあるが、「一の色を見てこれを青と判断した」とき、「青」という”言葉”の意味はまさにその「一の色」なのである。

意味とは言葉と経験との関係により生じるものであって、経験と経験との関係とはあくまで同一性やら類似性（あるいは相違、または因果関係）の問題なのである。西田はこれらを混同してしまっているのだ。

もちろん、過去にその言葉を教えてもらったり何かで見たり聞いたりして知ったという経験があったからこそ、今その言葉を用いて特定の経験を説明・表現できるのだ、という分析はごくまっとうなものである。過去にその言葉と特定との経験との関係を知っていたからこそ、今判断が可能だという分析も至極まっとうなものである。

しかし、それはあくまで私にとっての、その言葉の「由来」の問題であって、「言葉の意味とは何か」という問題とは違うのである。**因果関係の問題と言葉の意味の問題とを混同してはならないのである。**

例えば或る聴覚についてこれを鐘声と判じた時は、ただ過去の経験中においてこれが位置を定めたのである。(25 ページ)

・・・純粹経験の事実としては、「或る聴覚」が現れ、「鐘声」という言語表現がなされた、「ある聴覚」と「鐘声」とが繋がった、その経験があるだけである。そこで「或る聴覚」それこそが「鐘声」の「意味」なのである。そして、それが「過去の経験中」のものとの関係があるのかどうかとは別の問題なのである。

西田は、経験と経験との関係と、言語と経験との関係を混同してしまい、言語表現の純粹経験における位置づけの問題を見逃してしまっているのだ。

(2) 純粹経験を”状態”として分析する誤謬⇒純粹経験として現れない”背後にある”想定概念による根拠づけ

純粹経験はかく自ら差別相を具えた者とすれば、これに加えられる意味或いは判断というのは如何なる者であろうか、またこれと純粹経験との関係は如何であろう。・・・(中略)・・・意味とか判断とかを生ずるのもつまり現在の意識を過去の意識に結合するより起こるのである。即ちこれを大なる意識系統の中に統一する統一作用に基づくのである。意味とか判断とかいうのは現在意識の位置を現わすに過ぎない。例えば或る聴覚についてこれを鐘声と判じた時は、ただ過去の経験中においてこれが位置を定めたのである。それで、いかなる意識があっても、それが厳密なる統一の状態にある間は、いつでも純粹経験である、即ち単に事実である。これに反し、この統一が破れた時、即ち他との関係に入った時、意味を生じ判断を生ずるのである。我々に直接に現われ来る純粹経験に対し、すぐ過去の意識が働いて来るので、これが現在意識の一部と結合し一部と衝突し、ここに純粹経験の状態が分析せられ破壊せられるようになる。意味とか判断とかいうものはこの不統一の状態である。(25～26 ページ)

・・・ここでも西田は、純粹経験を”状態”として分析するという誤謬を繰り返してしまっている。繰り返すが「純粹経験の状態」であったりそれが「破壊」されたりするのではなく、純粹経験が「変化」したり新たな経験が「現れ」たりしているだけなのだ。その誤謬故に、「しかしこの統一、不統一ということも、よく考えてみると畢竟程度の差である」(26 ページ)という苦し紛れの辻褃合わせを持ち込まざるをえなくなってしまうのである。そして、その辻褃合わせの根拠づけをするために、

凡ての意識は体系的発展である。瞬間的知識であっても種々の対立、変化を含蓄して居るように、意味とか判断とかいう如き関係の意識の背後には、この関係を成立せしむる統一的意識がなければならぬ。(26 ページ)

・・・というように、「意識の背後」にある想定概念、「統一的意識」というものを設定せざるをえなくなってしまうているのだ。これこそ純粋経験ではない「仮想概念」以外の何物でもない。

意識はその現れたる処につ〔尽〕いて居るのではなく、含蓄的に他と関係をもつて居る。現在はいつでも大なる体系の一部と見ることが出来る。(26~27 ページ)

・・・大なる体系とはいったい何なのであろうか？「一の色を見てこれを青と判断した」とき、特定の経験を「色彩」という「体系」の中に位置づけた、とかそういう説明はもちろんできよう。しかし、これも事後的辻褃合わせ、因果関係による説明付けである。

純粋経験の事実としては、何か見えてそれを「青」と呼んだ、それだけなのであって、それが何らかの「体系」の中に位置づけられているのかどうか、その事実そのものは何も語ってなどいないのである。理論を転倒させてはならない。あくまでまずは純粋経験の事実ありき、「体系」というのはそれらを因果関係の連鎖により繋げることで導かれる概念なのである。

「大なる体系」があろうがなかろうが、言葉と経験が繋がれば、その経験がその言葉の意味となるのである（その経験を意味と呼んでいるのである）。話は非常に単純なのだ。

(3) 純粋経験は何も超越しない

かく意味という者も大なる統一の作用であるとするれば、純粋経験はかかる場合において自己の範囲を超越するのであろうか。たとえば記憶において過去と関係し意志において未来と関係する時、純粋経験は現在を超越すると考えることが出来るであろうか。心理学者は意識は物でなく事件である、されば時々刻々に新であって、同一の意識が再生することはないという。しかし余はかかる考は純粋経験説の立脚地より見たのではなく、かえって過去は再び還らず、未来は未だ来らずというの時間性質より推理したのではないかと思う。純粋経験の立脚地より見れば、同一内容の意識はどこまでも同一の意識とせねばなるまい。例えば思惟或は意志において一つの目的表象が連続的に働く時、我々はこれを一つの者と見なければならぬように、たといその統一作用が時間上には切れていても、一つの者と見えねばならぬと思う。(27 ページ)

・・・純粹経験が「自己の範囲を超越する」とか「現在を超越する」というのは的外れな分析ではなかろうか。また、さらに厳密に指摘すれば、経験は「意識」ではない。経験は経験である。

「意味」というものが「大なる統一の作用」ではなく、言葉に対応する経験であることを踏まえれば、どこまでも言語表現と経験との関係なのである。そして言語表現したことも否定しようのない具体的経験の事実である。つまり、どこまでも純粹経験、ある経験を「過去」と判断したことも純粹経験であるし、第Ⅲ章で述べたように、「未来に対する欲求」といったところで、結局は思い浮かんだ心像やら言語表現やら、あるいは実際に描いた絵やら図やら、それに伴う情動的感覚やら、そういった具体的経験に還元されてしまうのである。

西田自身が「過去」について説明している。

記憶においても、過去の意識が直に起ってくるのではなく、従って過去を直覚するのもない。過去と感ずるのも現在の感情である。抽象的概念といっても決して超経験的の者ではなく、やはり一種の現在意識である。(18 ページ)

・・・そういうことなのである。過去があってその経験が現れてくるのではなく、ある経験（心像やら）が現れ、それを過去の経験と見なしている、判断している、ということなのである。

話は少し逸れるが、私たちは、過去⇒現在（という瞬間）⇒未来、と「常に流れる時間」という概念的フォーマットを受け入れている、ということは事実である。しかし、その概念・言葉の由来は純粹経験の事実は語ってくれない。ただ因果関係を辿りながら、過去であるという確信を得ているとも言える。例えば目の前の紙切れに「リンゴを買う」とメモしてあったとする。メモを読んではいるが今それを書いてはいるのではない。一方、そのメモを自分が書いていた状況を（心像として）思い出せたとする。すれば過去に自分が書いたメモだ、と根拠づけることもできよう。

ただ、それら因果律による事象の関連付けは可疑的なものであり、その思い出した光景自体も勘違いなのかもしれない。ただ、いずれにせよ時間と経験との関連づけとはそういうものなのである。日常生活において、それら概念的な時間フォーマットはとりあえず問題なく機能している。

しかし、そういった概念的フォーマットと実際の経験とが齟齬を来すこともあり、それが「現在について考える時、已に現在にあらずというような思想上の現在」（20 ページ）、あるいは「現在」という「瞬間」とはゼロなのか否か、のようなパラドクスを生み出しているのである。つまり上記の一般的時間概念（過去⇒現在⇒未来、と

「常に流れる時間」) は純粹經驗を完全に説明しきれてはいない、ということでもあるのだ。

<追記>

本稿を引用・参照される場合は、出典を明記してくださるようお願いいたします。
因果関係の問題に関しては、以下のレポート

「アイデア」こそが「概念の実体化の錯誤」そのものである ～竹田青嗣著『プラトン入門』
検証

http://miya.aki.gs/miya/miya_report11.pdf

・・・の「V. 因果関係とは」(10 ページ～) で詳細に説明しています。
純粹經驗における自我・主体の問題に関しては、

純粹經驗には「意識」も「思考」も「作用」も「証人」もない
～「意識」は存在するのか (W.ジェイムズ著) の批判的分析

http://miya.aki.gs/miya/miya_report12.pdf

純粹經驗における意志・動機の位置づけについては、

価値・理念について議論するとはどういうことなのか
～「なんのための」社会学か? の批判的検証を中心に

<http://miya.aki.gs/miya/shakaigaku1.pdf>

・・・でも取り扱っているのでそちらもご覧ください。